

にきって  
フル  
スイング

小説 神楽陽子  
挿絵 はっとりまさき

立ち読み版



第一話

にぎつてにぎられ三角関係

第二話

ナースのてぶくろ

第三話

ふたりきりはキケンがいつぱい？

第四話

ハメブリって何ですか？

第五話

にぎつて、僕のエスペランサー

## 登場人物紹介

Characters



おおとり ゆきな  
**鳳 由希奈**

二学期になって引越し先から戻ってきた、悠斗の幼馴染み。学院では手芸部に所属している。みんなが振り返るほどの巨乳ちゃん。

しのみやみお  
**篠ノ宮 美緒**

悠斗の1つ年上の幼馴染みで、生徒会長。クールな表情と優美な立ち振る舞いに憧れる生徒も数多い。

さえき ゆうと  
**佐伯 悠斗**

由希奈と美緒にアプローチされながらも選びきれず、日々悶々としている少年。



奥手な青年に、さらに美緒は自分のハイレグカットも引つ張って見せびらかす。

おへそから股間へと伸びる薄生地が少しだけ剥がれ、露出寸前。見ているほうが恥ずかしく、顔に熱が集まってくる。

(由希奈ちゃんまで一緒にあって、水着で一体?)

美緒は黒、由希奈は白のニータイツを伸ばす、清潔な太腿が、左右にふたつずつまわり込んできた。布団から出られない裸の男の子を囲み、目のやり場を埋めてしまう。

「そろそろ始めましょうか、この間のデートの、つ・づ・き。こないだはオシッコになっちゃったでしょう?」

先に美緒から前のめりになって、年上の顔立ちに勝気な笑みを浮かべた。白衣の前を開き、競泳水着のプロポーションを惜しみなく開放する。

すると由希奈も腕を交差させ、おずおずと巨乳を運んだ。

「次こそはちゃんとお手伝いできるようにって、勉強してきたんですよ」

こちらは果実にサイズがありすぎるせいで、始めからナース服のボタンが届かない。あどけない小顔を初心な恥じらいで満たし、ふらふらと視線を迷わせる。

「こないだの続き……勉強って、まさか……?」

悠斗はぐくりと息を呑み、ふたりの水着姿を見比べた。よつつの膨らみとふたつの谷間が、ベッド越しに向かい合う。

「興味津々のくせに。お・勉・強、してみたいでしょう？」

右からは自信家の美緒が、ベッドに太腿を片方だけ乗りあがらせた。ストレートヘアをかきあげ、その毛先でお尻を撫で降ろす。

由希奈の爆乳は言わずもがな、美緒の胸も谷間で曲線を擦り合わせるほどのボリュームがあった。着やせするタイプらしく、競泳水着のラインを肉感的に盛り上げている。

「悠斗くんも男の子だもの、ガマンできない日もあるわよね」

水着姿のせいとか、ナース服は白いスポーツタオルを掛けたようにも見えた。

対抗して左からも、由希奈がおずおずと近づいてくる。競泳水着がはちきれそうなボリュームの豊乳を、恥ずかしそうに寄せ上げて。

「こ、興奮しちゃってますか？ ユーくん、わたしのカラダで……」

その谷間は深く、薄生地に向こう側で魅惑的な暗がりを作っていた。

「コーフンとかガマンって、待ってよ！ 由希奈ちゃんも美緒ちゃんも本気なの？」

悠斗は困惑し、右を見ては左を見て、幼馴染みの水着姿に慌てふためく。

「観念なさい。由希奈、ちよつと押さえてて」

「じつとしてくださいね。こ、これも将来のためです」

しかし由希奈に布団ごと押さえつけられ、その隙に美緒が、男子の両手をベッドの上端にテーピングしてしまう。

「美緒ちゃん？ 一体どうする気……」

「大きな声を出したら見つかるわよ。まずは確認させてもらおう」

腕を拘束されていては、布団を取り戻すことができなかつた。今まで男の子の生理現象を隠していた一枚が、ベッドから剥がされる。

「ちよっ、これはその！」

すでにオチンチンは膨張を始め、亀頭を持ち上げつつあつた。美少女たちの際どい水着姿と、迫ってくる色気にあてられてしまつて、鎮まらない。

自製の利かない性的興奮をカラダで白状させられ、羞恥の炎が吹き荒れる。

（ほんとにポッキしちゃつてるよ！）

肉棒は雄々しく、自力で反りあがるほどの勃起ぶりだつた。

先日の半勃ち未満とは違い、竹刀の先端を弓なりに曲げたかのような形状で、太さもそれと同じくらい。サオの表面には血管が浮かび、脈とともに全体がのたうつ。

「ほんとにこれ、あの……こないだのと同じもの、なんですか？」

悠斗のサイズに驚いたらしい由希奈が、こわごわと瞳を開いた。赤らんだ小顔を両手で覆いつつ、指の隙間から遠慮がちに視線を投げ込む。

「ま、漫画で見た通りじゃない。大きくなるのはわかつていたことだし」

状況を支配していたはずの美緒も動揺は隠せなかつた。頬を染め、オチンチンの元気の

よさに気圧されるように驚く。

「……こんなに大きくなるモノだったなんて」

先日は排泄のためにむしろ縮んでいた、とはどちらも知るまい。

射精を前提とした本物の勃起は、亀頭を赤々と腫れ上がらせていた。まだ包皮が引っ掛かっているものの、エラの輪郭も目に見える。

「どーしてこんなことするのか、聞いてもいいかな……？」

潔癖症の気がある由希奈にしろ、上から目線の美緒にしろ、「サービスしてあげる」とカラダで下手に媚びてくるタイプではないはずだった。

股間のモノは期待を抱きつつある一方で、一抹の不安を拭いきれない。

「日曜のオシッコ、あれって悠斗クンじゃなく、私たちのほうに原因があつたんじやないかって。由希奈とそんな話になったのよ」

「そうなんです。こないだは何も知りませんでしたし……ちゃんと勉強して、次こそはユーくんを満足させてあげよう」と

ハイレゲカットの水着姿がそそるナースたちが、それこそ手術でも始めるかのように、滅菌手袋を手首まで引き絞った。

半透明の生地は薄く、指は五本とも先端が爪で尖っている。

「今日こそ精子を出させてあげるわ。悠斗クン」

「いやちよつと！　こーいうコトは三人でやるものでもないしっ？」

「ユークんの言う通りです。わたしひとりでもでき……で、できますから。美緒ちゃんは見ててください」

二枚のてのひらは男の子の股座へと滑り落ち、競い合つてタマを掴み取つた。

「そんなトコ汚いよ、うああ？」

「だから手袋を嵌めてるんじゃないの」

少し触られたただけなのに、股関節にぞくりと震えが走る。

（ドコ触つてるんだよ、ふたりとも！）

自分でも滅多に弄ることのない玉袋の裏側を、複数の指でかきほぐされた。動きの遅い指に素早い指が混ざり、睾丸の繋ぎ目に割り込む。

「美緒ちゃんは日曜、先にしてたじゃないですか。今日はわたしからですよ」

「仕方ないわね、先攻は譲つてあげる。でも本当にできるの？」

片方の手が離れ、残つたのはとろくさいほうだった。

「……で、できますもん」

手袋を嵌めていようと、男性の排泄器官に触れることに抵抗はあるらしい。それでも由希奈は、生き物めいたペニスの反応を窺いつつ、左手の薬指で裏筋をなぞつた。

「由希奈ちゃん？　エッチなのはいけないんじゃない……」



「こつ、これはぎりぎりエッチじゃないんです。触るだけで」

接触を避けるべく反つていた人差し指と中指も、亀頭の高さで親指と合流する。

「あああ？　そこ、はあつ、敏感だから！」

始まって数秒も経たないうちに、男の子は情けない悲鳴をあげた。

手袋は指の又までフィットしており、由希奈の手遊びをダイレクトに読み取ってしまった。ラテックス製のそれは、ゴム手袋を限界まで薄くしたような感触だ。

まだ生地が冷たく、相対的にオチンチンの熱さを自覚できる。

「確かこうやって……どうですか？　ユークン、こんな感じだと思っただけですけど」

つぶらな瞳を瞬かせながら、由希奈は悠斗の反応を窺っていた。

「待つて由希奈ちゃん、そつ、そんなふうにされたら！」

先端で集まった指が再び分かれ、サオをばらばらに伝い落ちていく。縦笛で一曲奏でるかのように細やかな手つきから、目が離せない。

「効いてるみたいね。ほら由希奈、すぐドキドキしてるわ」

しかも美緒の手が胴着をのけ、悠斗の胸元をさわさわと撫で始めた。

由希奈のほうは独り占めするみたいに、両手でペニスを包み込む。サオを反りあがる方向に押さえつつ、玉袋を押し揉むのは、彼女の意図になかったとしても挑発的。

「ユークンったら……なんだか熱くなってきてますよ？」

ナースたちは触診でもするみたいに、裸の男の子をくすぐった。グローブの中央を平らになるまで広げ、わき腹や、太腿の内側も念入りに擦りたててくる。

男性なりに尖っている小さな乳首も、くにくにと弄られた。

「これって、んはあ、どういう……美緒ちゃんっ！ 何企んでるの？」

「だから由希奈と、実際にやって確かめようってことになったの。どうやったら男の子がオシッコじゃなく精子を出すのか」

股間で再び、美緒の手と由希奈の手が指を混ぜ、性毛を半々にかき分ける。

初々しい由希奈は眉を八の字にして困惑しつつ、玉袋の裏側を撫でた。手つきが優しいのは、怖気づいて力が入りきらないせいかも。

「男の子って処理とかしないんですか？ そ、その……」

「処理っていうか、するけど、こんなふうにするんじゃないかって」

年上の美緒が挑発的な余裕を浮かべ、サオの半ばを強めに握ってしまふ。

「ムダ毛の話だと思っわよ？ ライオンさんみたいで、ちよっと可愛いじゃない」

獅子にひけを取らない野生的な肉棒が、びくんと過敏に脈打った。美緒の意地悪な視線も、由希奈の健気な視線も、劣情という男心を燃え上がらせる。

（だめだ、ヘンな気分……！）

いきり勃つペニスに、またナースのおててが這い上がった。

「ふふっ、さきつちよはどんなふうになつてるの？」

丁寧な触診が雁首の皮を剥き降ろし、赤腫れた「患部」を裸にする。

「こんなに真つ赤になるんですか？ ユーくん、なんだか痛そうですけど……」

「痛がつてるんじゃないなくて気持ちいいのよ。ねえ悠斗くん、知ってる？ このグローブの素材、コンドームにも使われてるらしいわ」

仰向けになつてしていると股間に重量を感じるほど、勃起が存在感を増した。亀頭はエラを張り、より擦れやすい形になつている。

「コンドームつて、くう、そ、そんなの知らないつてば」

露出は恥ずかしいはずなのに、奇妙な高揚感が男の子の息を荒らす。

（オナニーよりすごいことになつちやつてるよ！）

それこそ恥部を女の子に見せびらかすことに、熱い興奮を禁じえなかつた。ナースたちの色っぽい水着姿を、つい遠慮なしに眺め、肌の柔らかさを想像してしまふ。

「やめてつてば、ふたりとも……はあつ、由希奈ちゃん？」

そんな男の子の目の前で、由希奈が前のめりになつて巨乳を揺らした。潤いたつぶりの唇から舌を出し、手袋へと涎を落とす。

「濡らせばいいんですよ？ 確か、ン、こうやつて」

「そうだったわね。ココはとても敏感みたいだし」

美緒も唾液の糸を指で編むように絡めた。

(ヨダレまで？ どっちのおおても、ぬちゃぬちゃって！)

粘っこい液で生温かくなつた感触が、悠斗のペニスをいやらしい音で包み込む。

ぬちゅぬちゅ！ ぬちやつ！

ふたり掛かりで涎を追加され、手淫は充分な潤滑油を得た。ナースたちの入念でいて淫猥なマッサージが、一本しかないオチンチンに集中する。

「こうですか？ ユーくん、んふっ、またビクビクしてしちゃってますよ」

「扱き方に間違いはないようね。勉強の成果、もつと見せてあげるわ」

ふたりとも面白がつてしまつて、由希奈まで指の巻きつけ方が巧みになつてきた。美緒も微笑み、舌なめずりで嗜虐的な悦びを覗かせる。

感じやすい性感帯を擦られ、身体中がみるみる過熱した。滲んだ恥汗も、ナースふたりのひらで舐めるように回収されていく。

「っはあ、ほんとに僕、そんなにされたら……くう！」

意図になく悠斗はマゾヒスティックな声をあげ、胴震いを起こした。涎まみれの手袋で扱かれるなど初めてで、射精への期待が大きくなつてしまう。腕の拘束にかかわらず、四肢が引き攣つてしまつて動けなくて、ペニスを脈打たせるしかない。

ぬちゅっ……ぬちゃぬちゃ！



「これでいいかな？ はあ、僕のにびったりみたいだ」

「編み込みで模様もつけてみますね。いいデザイン思いついちゃいました」

糸の一部は腰に引っ掛けられ、V字のストラップとなった。この段階でキンタマ専用のハンモックが完成である。

二本の人差し指が細やかに動き、肉棒に毛糸を紡いでいく。

誰かが部室の前を通り掛かろうと、彼女の艶かしい手つきから目が離せなかった。由希奈の前でなら、下半身が裸であることに躊躇いも小さくなり、性的な進展が嬉しい。

「っはあ！ 気持ちいいよ、由希奈ちゃん……うああっ、また締まる！」

指が毛糸を換えつつ交差するたび、玉袋の締め付けに力が加わる。

さらに人差し指は少しずつ高度を上げ、サオの中腹あたりでリボンを編んだ。

「すぐくビクビクして……やん、ちよつとにおいますよお？」

毛糸の裏が汗で蒸れ、牡のにおいを濃くする。それを由希奈は嫌がることなく嗅いで、むしろより呼吸を深めた。

「ごめん、臭かったかな？ なんていうか皮の裏に」

排泄器官である以上、よい香りではないはずなのに。普段は包皮が雁首の括れを覆っているため、どうしても性臭は溜まってしまう。

それでも由希奈は楽しそうな笑みで、無邪気に編み物を続けてくれた。

「たくさん作ってあげますから、毎日着けてくれますか？」

「毎日？ そ、それは……さすがに恥ずかしすぎ、うあつ？ そこは！」

サオを徘徊していた人差し指が、膨満した亀頭に乗りあがる。玉袋のハンモックを引き締めながら、由希奈は雁太を集中的にくすぐりたてた。

「着けるって約束しないと、えれあ、もう編んであげませんよお？」

しかも唇から舌を出し、指先に涎を合流させる。

煮えた唾液が毛糸を伝って、剥き身の雁首に染み渡った。粘り気を得た手袋の生地が、感じやすい亀頭に痛すぎることにない快感をばらまく。

「すっ、する！ 約束するからもつと……！」

甘い痺れが癖になり、中断されてしまつては狂おしい。悠斗は正直に要求し、幼馴染みの髪を撫でることも急かした。

すると人差し指が毛糸を引きながら、亀頭を細やかに擦りたてる。

「ちゃんとしてあげます。んもう、ユーくんだったら、あはあ、可愛いんですから」

甘えたがりの由希奈は頬を染め、上目遣いで男の子の苦悶ぶりを窺っていた。保健室でのプレイ経験もあつて、さきつちよが特に弱いことは理解しているに違いない。

指の側面がたつぷりと唾液を絡め、鈴口に刺激を差し込む。

「ほおらビクビクしちゃってます。気持ちいいですか？」

「い、いいよ……自分でするより断然」

オチンチンは摩擦に痺れを同調させ、すでに悠斗の制御から離れていた。いつ果てるとも知れない感覚が股間に集束する。

（こないだみたいに出ちゃうかも？ 由希奈ちゃんの前で……）

射精できてしまえる期待も高揚感を舞い上がらせた。オチンチンが過熱し、幼馴染みの指遊びにガマン汁を紛れ込ませる。

ところが由希奈は不意に手を止め、もじもじと腰をくねらせた。困ったような表情で紅潮し、視線をあさつての方向に泳がせる。

「……あの、ユークン？ 今度は反対側から編まなくちゃいけないんです」

表だけでなく裏からも糸を通す必要があるらしい。けれどもペニスをひっくり返すことができるわけもなく、これ以上は編めなくなってしまうたわけだ。

「じ、じゃあさ。僕の上に乗って、こっちから……とか」

悠斗は座ったままのけぞり、自分の身体を「椅子」として差し出した。ここに由希奈が跨れば、青年と同じ目線で肉棒を編むことができる。

「やだ、そんな……恥ずかしすぎます」

慎み深い由希奈は赤面したが、まんざらでもない様子で勃起を見詰めていた。ごくくり、と咽を鳴らすような素振りの後、おずおずと立ち上がってロングヘアを波打たせる。



「でも……ユークンがじつとしててくれるなら、わたし」

「うん。いいよ、座って」

男の子の身体を椅子として、彼女の後ろ姿がおもむろに降りてきた。遠慮がちに腰を浮かせつつ、悠斗の下腹部寄りにお尻を乗せ、同じ方向から同じモノを見下ろす。

さらさらのロングヘアが悠斗のわき腹へと流れ、甘い香りを漂わせた。

「お、重かったりしませんか？ わたし」

気が気でならないらしい体重は、肉付きのよい太腿やお尻、そして豊乳のせいだろう。彼女の存在感をずっしりと感じられて、悠斗にとっては心地よい。

「平気だよ。これはこれで気持ち……その、全然重くなんかないから」

しかも勃起がスカートをくぐり、ショーツしかない女の子の股間に触れてしまう。由希奈は脚を八の字に開き、恥丘でサオの根元を押さえた。

「ええと、僕が押さえてたほうがいいよね？」

緊張しつつ、悠斗は彼女のウエストに腕を巻く。簡単に抱いてしまえる細さだ。

「はい、お願いしますね。……後ろからユークんにぎゅってされると、なんだかあのこと思い出しちゃいます」

重心のバランスを悠斗に任せて、由希奈は編み物を再開した。器用な手先で糸を紡ぎ、リボンの反対側を締め上げていく。人差し指の交差がサオに触れて、くすぐったい。

「んはあつ、昔って、やつぱりあれのこと？ 今そんなの思い出したら、僕」

ペニスにリズムよく与えられる快感に悶えながら、悠斗は女の子の芳しさを堪能した。綺麗な髪を自分のものみたいに梳くうち、遠慮がなくなってくる。

目当てはポリウムたっぷりのおっぱい。

「……いいですよ？ ユーくんがおつきしたんですから、ユーくんのモノです」

男の子の思惑を知りながら、由希奈が恥ずかしそうに制服の胸元を開く。

小学生の高学年になり、彼女が誰よりも早くブラジャーを着け始めた時のことだ。今ほどストリートな性欲がなかった少年は、それを羨ましがって、見せてもらったり、触らせてもらったりしたのである。

（あれから大きくなったんだよね、こんなに）

昔と同じ行為でも、今は特別な意味を持ってしまうことを、お互いが理解していた。だからこそ甘い緊張感が立ち込め、自然と合意に頷ける。

「じゃあちよつとだけ。……ほんとに触っちゃうよ？ 由希奈ちゃん」

自分のグローブを外してから、悠斗は幼馴染みの制服にできた隙間を広げた。すると取り出すまでもなく、ふたつの乳果が転がってブラジャーを牽引する。

「きゃ！ ……ユーくん、あの、優しくしてくださいね？ デリケートなんです……」

由希奈は恥じらいに満ちた小顔を赤らめ、股下の肉棒をぎゅつと握った。そこを扱けば

男の子の息遣いも荒々しくなる、とわかっているはずなのに。

「由希奈ちゃんつてば、はあつ、見ちゃうぞ？」

ロングヘア越しに覗き込むと、白いフリルで囲われた巨乳を目の当たりにできる。

ブラジャーの三角形は膨らみに押し上げられ、下乳の曲線が食み出していた。たわわなボリリュームが深い谷間を作り、男の子の視線を誘い込む。

「ほんとにおっきいなあ。ものすごいサイズなんでしょ、これ」

「ユ、ユークんのせいなんですよ？ あんなふうにはタタタ触ったりするから」

悠斗の率直な感想に、由希奈はますます赤面してしまった。それでもオチンチンを離さず、思い出と同じ抱擁を待ち侘びている。

（確か昔もこうやって、背中の中から……あつた！）

その時の記憶を遡りながら、悠斗は女子の制服に手を突っ込んだ。わき腹を通って背中をまさぐり、ブラジャーのホックをパチツと外す。

すると三角形の布地がはらりと。

「やつやだ、ユークん、ブラの外し方なんて憶えてたんですか？」

由希奈の巨乳は照り返るような艶を放った。ほんのりと火照って汗ばんでおり、先端のピンク色が男の子の目を釘付けにする。

「うわあ……これが由希奈ちゃんのおっぱい……」

無意識に悠斗は感想を吐露していた。「大きい」や「すごい」ではなく、「おっぱい」ただけ言えば驚きとなる、圧倒的な存在感だ。乳頭は小指の先ほどのサイズがふたつ。

(ずっと触ってみたかったんだ、これ！)

逸る気持ちを抑え、壊れ物を扱うくらい慎重さで触れると、両手いっぱい柔からさが転がった。ブラジャーのない曲線は重力に引かれ、下に行くほど広がっている。

「んはああ？　だめ、声出ちゃいます……ユークン、誰も通ってない時に」

今になって由希奈は廊下の人通りを気にしているらしい。

「もう止まないよ。はあ、由希奈ちゃんだって、僕の触ってるじゃないか」

悠斗が熟した膨らみに手を這わせれば、彼女もペニスを強く握ってくれた。編みかけのリボンが解け、裸となったサオに、手袋越しの上下運動が降りてくる。

となったら、お返しにもっと揉んでやらないと。

(むにむにしてるぞ？　指が埋まっちゃって掴めないよ)

ふくよかな柔乳は、両脇から持ち上げられることで谷間を縦長に伸ばした。主成分は脂肪らしいが、特大のワラビ餅でも揉んでいるみたいだ。

「ユークンの触り方、あはあ、昔よりやらしいです……そつ、そんなふうにしちゃ！」  
乳首を弾くと、しこっているのがわかる。

「由希奈ちゃんのおてのほうが、ふうつ、絶対やらしいよ」

汗でべとつく乳果を揉みしだきながら、悠斗は被虐的かつ自発的に息を乱した。ペニスを扱かれて感じているのを、もっと彼女に知って欲しくて、たまらない。乳頭をふたつ一遍に摘んでやると、由希奈も悩ましい声をあげ、敏感そうに腰を波打たせる。

「ああん！ ゆ、ユークんってば、エッチすぎい」

豊満な肉体は充分に温もり、言葉にも熱っぽい喘ぎが混ざった。

手首の返しが上達しつつあるテコキに、湿った感触が紛れ込む。サオの背を撫でるような位置にあるのは、おそろくショーツだ。

（由希奈ちゃんのパンツ、もしかして、これって濡れてる？）

女の子は興奮すること出入口を濡らす、という知識は漠然とあった。しかし液の量からして、お漏らしに思ってしまうほど。熱い液が玉袋のハンモックに染みる。

「すぐおつきく、柔らかくなつたよね、はあ、由希奈ちゃんのおっぱい」

「引つ張つたら伸びちゃいますっ、あひい！ いじわるしないでください……っ！」

テコキに負けじと悠斗も乳遊びに耽り、曲線にありつた指の指を食い込ませた。それでも全体の半分も掴むことができない。

一方で由希奈のほうは、両手でほぼ完全にサオを密封してしまう。可愛い握力は窮屈さによって圧力を高め、尿道のガマン汁を押し出した。

「ユークんのがまた熱く……んはっあ、わたし、どうにかなつちやいそうです」

右手と左手に紛れてショーツの土手を擦り付け、由希奈が太腿に痺れを走らせる。秘裂を慰めていることが、ばれていないと思っているのか、単に自覚がないだけなのか。

「編み物の続きは？ 由希奈ちゃん、作ってくれるんでしょ」

耳元でそう囁くと、おててはテコキを一旦解いた。改めて毛糸を拾いなおし、亀頭の上で人差し指を突つつき合わせる。

「今編んでるのでサイズ測りますから、ン、おつきくさせてくださいね？」

サオの表面で毛糸が少しずつ生地になり始めた。人差し指が糸を交換するたび、雁太に擦れて心地よい。悠斗は息を荒らげ、より強めに生乳を押し揉む。

「そっそうそう！ んはあ、いっぱい編んで！」

どちらとも相手をリードしていられなかった。手編みの最中に由希奈も声を上擦らせ、巨乳が火照ってきた肉体をくねらせる。

「そんなにしちゃ、あんっ、あ、編めないですよお！」

毛糸は女の子の股間から淫液を引きずり出しつつ、オチンチンに絡みついた。摩擦熱ではない、ぬっちよりとした熱さが勃起に染み込んで、興奮をもたらす。

ぬちゃ！ ぬちゃっ、ぬちゅ！ ぬちゃぬちゃ！

由希奈の手芸は、それこそ楽器のように粘音を奏でた。中指や薬指の間を通ってきた毛糸が、必ず人差し指の先端に達し、ペニスへと投げかけられる。

「僕だって……ここ？　ここがいいのかな、はあつ、由希奈ちゃんは」

悠斗のほうも汗ばんだ豊乳に両手を這い上がらせ、乳芽を弄った。巨乳少女の息遣いが安らぐ瞬間を狙って、擦りたててやると、喘ぎがまた切なくなる。

「えふううんっ！　ユークン、そんな、へああ！　さきつちよばかりい！」

オチンチンに人差し指をくいっと引つ掛けながら、由希奈は清純な小顔を恥じらいで満たした。唇の両端が緩み、ぎりぎり涎を溜め込む。

お互い性感帯の尖った部分を擦り合せて、相手の肉体を昂らせた。

（由希奈ちゃんのおっぱい、もっとうちやって）

悶えているのが当たり前のムードとなり、淫らな気分を盛り上げる。幼馴染みの成熟した肉体に興味をそそられ、おへそを撫でたり、胸の谷間に片手を突っ込んでみたり。

しかし必ず乳果の先端に戻り、柔らかな感触を引つ張って弄ぶ。

「ひあつは、だめ、おっぱいでイっちゃいますから……ンッ！　んああ！」

「イクって？　由希奈ちゃん、まさかオナニーとか」

凶星を突かれたらしい彼女の小顔が赤々と染まった。「イっちゃう」と言ったからには、女性なりにオナニーの経験があるのだろう。その事実が悠斗をますます興奮させ、巨乳を揉みしだく回数を増やす。

「女の子も、つふう、オナニーしてイっちゃったりするんだ？」

「だ、だって……ユークんのこと、あん、ヘンに想像しちゃうんです！」

恥ずかしがって悦がりつつ、由希奈は手編みのペースを上げた。真つ赤な亀頭をくにと弄り、むしろ自分のカラダが欲しているかのように、細やかな刺激を与える。

瞳には涙を溜め、もしかすると嫌がっている表情なのかもしれない。けれども悠斗は、幼馴染みの顔つきにほんの少し笑みが浮かぶのを、見逃さなかった。

「僕もイクよ！ はあつ、由希奈ちゃんと一緒に！」

悶え狂う彼女のことがいとおしくて、胸にあつた気持ちちが肉棒を熱くする。

「い、一緒ですか？ わたしだけなんてイヤですよ？ んあふつ、ぜつたい、ユークんもわたしといっしょに、えああはあ？」

液濡れの人差し指は一对となり、亀頭を磨き続けてくれた。股間で膨らみ始めた意欲がオチンチンをぶるぶると震わせる。ガマン汁が尿道を通り抜けるのを堪えきれない。

ぬちやつぬちやつぬちやつ！ ぬちやつぬちやつぬちやつ！

しかも編み込まれたハンモックによって玉袋まで締め付けられた。ショーツ越しに彼女の秘裂が当たり、擦れてしまっている感触にも獣欲が燃え上がる。

「わつわたし、んはあ、もおいつちやいます！ ユークんにおっぱいされてえ！」

乳首をふたつとも同時に弄りまわすと、由希奈も競うように亀頭を弾いた。人差し指が交互に毛糸を入れ替えつつ、痺れついた怒張をなでなで。



速くなつていくペニスの拍動が、脈動だったものから吐出のものになる。

「出る！ 由希奈ちゃんのおでてに、僕の！ ああああああああああッ！」

汗みずくの巨乳をむんずと鷲掴みしながら、悠斗は悲鳴をあげた。

彼女の股間を持ち上げるほど反りあがった、逞しいオチンチンが熱い汚濁を放つ。甘美な放精感が矢継ぎ早に駆け抜け、舌を引つ込めていられない。

どびゅどびゅ！ びゅびゅっ！ びゆるびゆるびゆる！

由希奈がのけぞり、サオにより体重を掛けた。横開きの太腿を引き攀らせ、ショーツの股底をじわりと濡らす。

「ユーくん、わたしも……んふううううううう……ッ！」

彼女の肉穴に溜まっていたらしい液の熱さが、射精の興奮に拍車を掛けた。

びゅっ、びゆる！ びゅくびゅく！

可愛いおでてに握ってもらいながら、ペニスが灼熱を噴いて散らかす。蕩けるような肉悦に酩酊し、男の子は唇をわななかせた。

「うああ、気持ちいいよ、これ……はああああ！」

香汗で滑りやすいおっぱいに無理やり掴まって、彼女と腰の震えをシンクロさせる。

由希奈も唇から舌を見せるほど顔つきを弛緩させていた。上気しきった表情に玉の汗を浮かべ、潤んだ瞳を悦びで満たす。

「ユーくんのがたくさん、んあつはあ、おててに出ちゃってますう……！」

自分の肉体が果てたことより、悠斗の射精を嬉しがっているみたいだ。とば口から子種を溢れさせている亀頭を、てのひらで大切そうに包み込む。

びゅくん……びゅるっ、びくん……。

残りの牡汁は遠くに飛ぶことなく、手袋の中央で受け止められた。

オナニーの最後にティッシュを被せるのと、そう変わらないはずなのに、贅沢な愉悦を禁じえない。鳳由希奈に下の世話をしてもらっている実感が気を大きくする。

（また女の子のおててでイっちゃったよ、僕！）

やっと悠斗は生乳から手を剥がし、余韻の深みに嵌まるように虚脱した。

由希奈の手袋は精液まみれで、毛糸にも伝わっている。

「はあつ、すぐよかったよ、由希奈ちゃん」

悠斗からハンカチを差し出し、とりあえず両手だけでも拭ってもらった。改めて由希奈は色っぽい吐息を振りまきながら、仕上げに毛糸を切って結ぶ。

「これで完成ですよ。どうですか？ 穿き心地とか」

オチンチンは湿った生地で玉袋を包まれ、サオの半ばをリボンで飾り付けられた。男の子用のブラジャーみたいで恥ずかしい。

けれども、これを着用してしまう背徳感を拒否するつもりは欠片もなかった。先に椅子



から降りた由希奈に、少女趣味の装いとなったチンポを見せびらかす。

「びったりだよ。オチンチンが小さくなっても、はあ、タマの部分はこのままだし」

「たま？ うふふ、猫ちゃんみたく、鈴もつけちゃいます？」

まだまだドレスアップの構想があるらしく、由希奈は得意げな笑みを浮かべた。

カチャカチャ、ガチャッ！

ところが、浮ついたムードに開錠の音が割り込む。

（まさかっ？ あのシルエットは！）

悠斗と由希奈はぎくりと顔を見合わせ、大慌てで制服の乱れを調えた。

ドアを跳ね除けるように開いた生徒会長が、マスターキーの束をジャラッと鳴らす。

「説明会で手芸部の面々にあなたがいないと思ったら、やっぱりね」

「美緒ちゃん？ えっと、これはその！」

「悠斗くんは黙ってなさい。……この程度で私を出し抜けると思ったのかしら？ やつてくれるじゃない」

篠ノ宮美緒は悠斗の狼狽ぶりを一瞥し、すべてを悟った様子だった。

「ユ、ユークンがわたしにして欲しいって言ったんです！」

「ふうん？ 悠斗くんにそんな甲斐性、あるとは思えないけど」

由希奈の嘘も強がりも、彼女には通用しない。部室に踏み込んできただけで、場の流れ

を完全に掌握されてしまっている。

「……じゃあ、次は私にも見せてもらおうかしら。悠斗クンの正直なところ」

美緒はつかつかと歩みを進め、悠斗の手を取り上げた。

きびきびとした振る舞いには彼女なりの苛立ちが見て取れる。

「あ、あの……美緒ちゃん？」

今の美緒に逆らってはいけないことは本能で直感できた。

逆らえるとしたら、対等の立場にある由希奈だけ。

「ユークンをどこに連れてくんですか？ まだ舞台衣装の採寸が残ってるんです」

「なら彼女たちの採寸をあげて。あなたたち、あとはお願いね」

追いかけてくる由希奈を、美緒の息が掛かった女子生徒らが食い止める。

「デザインについて要望があります。もっと百合受けする感じにしてもらわないと」

「最大の集客効果を想定し、損益から経費を逆算する必要があります。衣装の出来栄によつては福沢先生を大勢お迎えできるかと」

「美緒ちゃんっ？ 待つてください、一対一じゃないなんて卑怯ですよー！」

学内の権限やら部費やらで動くタイプは、大半が生徒会長の味方だ。

篠ノ宮美緒は後ろ姿であっても隙がなく、気迫さえまとっている。麗しいストレートへ

アを悠々と靡かせながら歩く気丈な生徒会長のため、ほかの者は進んで道を空けた。

その後ろを悠斗がへっぴり腰でついていく。

(これは実用的じゃないよ……由希奈ちゃんには悪いけど)

何しろ股間のハンモックに玉袋を締め付けられているのだ。ずれたパンツみたいに脚の付け根と擦れ、気が気でならない。

「シャキつとなさい。悠斗くん、私に恥をかかせるつもり？」

「み、美緒ちゃんが恥をかくよーなことには……」

「男子の連れ方で私の評価も決まってくるの。ちゃんと隣に並んで」

やはり先ほどの件で彼女の機嫌を損ねてしまったようだ。年下の男の子に対し、普段の三割増しくらいで物言いが厳しい。

連れていかれた先はK立御剣学院の聖堂だった。

最新式の電子ロックも、マスターキーを持つ生徒会長の行く手を遮るほどではない。

「勝手に入っちゃっていいの？」

「私は生徒会長だもの。問題ないわ」

彼女は何も「学院のため、皆のため」に会長に立候補したのではなかった。生徒会長という立場を利用すれば、大抵の勝手が容易い、だけのこと。

聖堂の大広間には柱が等間隔で並び、石の祭壇を囲っていた。

中央には鞘入りの剣が静かに突き立てられている。

「あれが今度の劇で使う聖剣よ。なんて名前か、さすがに憶えたわよね」

「願いし誓約の剣エスペランサー、でしよ」

これがK立御剣学院に伝わる、一振りの剣だ。

学院の創立当初から現在に至るまで、さまざまな逸話が語られており、怪談のネタにされることも多い。夜中になると騎士の霊が出るとか、女性の歌声が聞こえるとか。

美緒は腕組みを深め、静寂を少しだけ破った。

「ここは神聖な場所よ。さっきのドアで最後、ここにはセンサーもカメラもないわ。そういったもので神を監視することは不敬だと、許されてないの」

物騒な刃物を安置しているにもかかわらず、防犯体制が不十分に思える。

「でもね、カメラを置かない理由はほかにもあるの。近年はさすがに実践されなくなったけど。悠斗クンにわかるかしら」

「え？ ええっと……ヘンなのが映っちゃったりするから、とか？」

学院の伝統に造詣が深い生徒会長が、したり顔ににんまりと笑みを浮かべた。一歩ずつ足の運びを遅くして、緊張気味な男の子ににじり寄る。

「ある意味正解ね。もしかして知ってるの？」

「知らないよ。それより美緒ちゃん、その、なんで近づいてくるのかな……？」

危機を感じてあとずさったところで、背中が柱に行き当たってしまふ。

「答えを教えてあげようと思つて。じつとなさい」

とうとう美緒は悠斗を、尻餅がつくまで追い詰め、脱がしに掛かった。神聖であるはずのこの場所で、真つ先にズボンを引きずりおろそうとする。

「ちよつ、美緒ちゃん？ ダメだつてば！ カメラがないから、とかじゃなくつて！」

「まだわからないの？ 騎士と王女を演じる男女は、ここで一夜を過ごす慣わしがあつたそうよ。聖剣にしがみついて、後ろから……してもらうんですつて」

強引な彼女でもセックスに本気ではない、と信じた。剣一本のために広々とした神聖な場所、罪深く交わるなど、いくら年頃の悠斗とて乗り気にはならなかつた。

「ストップ！ 今日はそのつそう、パ、パンツ！ 恥ずかしい柄だから！」

「由希奈には見せたんでしょう？ 観念しなさい」

しかし一番の問題は股間のアレ。制服を剥がされると、肌寒さが股下を走り抜けるものの、タマは蒸れつ放しで温かい。

悠斗は叫びそうになつた顔を両手で挟み、慄然とした。

（ひゃあああああ！ 見られた！ 美緒ちゃんに見られた！）

オチンチンが手編みの生地を膨らませ、ピンク色の亀頭を押し出す。悠斗のモノが最大の大きさになつてこそ、ぴったりのサイズとなる専用のブラジャーだ。



「……面白いことしてたのね、由希奈と。男の子のブラも可愛いじゃない」

性毛ごと玉袋を密封しているそれを見つけ、美緒がほくそ笑む。

「これは、ゆ、由希奈ちゃんが……」

珍妙な下着だけとなった男子は、脚を閉じることで勃起を隠した。けれど押し倒された体勢では動くに動けず、彼女の視線の支配下となる。

「由希奈のせいにするの？ そんなに喜んじゃってるくせに。上も脱ぎなさい」

「こんなところで裸になるのは、ちよつと」

「聞こえなかったの？ 脱ぎなさい」

逆らえるはずもない。悠斗は制服を脱ぎ、珍妙な下着姿となった。

「……ふふっ」

冷やかな笑みで見下されても、肉体は節操なしにペニスを脈打たせる。女の子に刺激してもらえらるることを、勝手に期待してしまっているみたいだ。

（ドキドキしてるのがとまんないよ……由希奈ちゃんに弄られたばかりだから？）

静謐であるべき聖堂で、肉の大剣がいきり勃つ。

曲線のついた黒いストッキングを、際どい高さまでスカートから覗かせながら、生徒会長は溜息を漏らした。

「私はね、溜まつてるのよ」

「え？ た、溜まってるって……何が？」

「ス・ト・レ・ス。学院祭が近いものだから、皆が私を頼ってくるの。家に帰っても電話で調整しないと間に合わないし。ねえ……私にも息抜きが必要だと思わない？」

含みのある言いまわしは決して答えを明言せず、男の子に勘付かせるだけ。ストレートヘアが悠斗の視界に差し掛かり、美緒の端整な顔立ちを近くする。

「そりゃ美緒ちゃん、放課後はずつと遅いし……」

「だったら息抜きに付き合ってくれるわよね？ 悠斗くん」

答えを指摘することは、同意の意思表示とみなされてしまった。

彼女の心労を知っているながら拒絶するような真似は許されない。生徒会長のサディステイックなストレス解消に付き合わされる羽目になる。

「そうだわ。由希奈みたいには編めないけど、私もブラを……」

美緒は自ら制服に隙間を作り、もそもそと背中側に両手をまわした。そして意味深にはにかむと、二枚綴りになっている薄紫色の布地を引っ張り出す。

彼女のブラジャーは妖艶な色合いで、由希奈であればフリルのところがレース仕立てになっっていた。思わず悠斗は目を見張り、ごくりと生唾を呑む。

「美緒ちゃん？ い、一体何を」

「ヘンタイの悠斗くんがもつと喜びそうなコトよ。……ねえ、着けてみない？」

三角形は二枚とも悠斗の平らな胸肌を重ねられた。疚しい遊びを強要されているのに、ぼうっとして、抵抗の理由が思い当たらなくなってくる。

「で、でも僕……そんなの恥ずかしいし」

「そわそわと気が逸るような心境で、むしろ男の子は律儀にじっとしていた。」

「それがいいんでしょう？ カオに出てるわよ、着けてみたいって」

美緒のブラジャーも大きく、男性の胸ではニップレスにさえ届かない。彼女の手がストラップを左右対称に繰り、仕上げにホックを留めてくれる。

（ほんとに着けちゃった！ 美緒ちゃんのブラ……）

着けられたのではなく、いつの間にか着けることを選んでいたのかも。ブラジャーを着用してしまうことに、悠斗は鳥肌の立つ背徳感とともに、性的興奮に芽生えつつあった。

「上半身はこれで女の子ね。お姫様役も似合いそうだわ」

まだ温もりが残っているブラジャーはぶかぶかだ。由希奈のサイズが規格外すぎるだけで、美緒の双乳も相当のボリュームがあることを実感させる。

（ヘンな気分になりそうだよ、美緒ちゃんのおっぱいって思うと）

美緒は制服の胸元を少しだけ開き、白い谷間を見せびらかした。ぎりぎり乳芽を見せない巧みな焦らし方で、初心な青年の視線を誘い込む。

「由希奈のと比べたりしちゃだめよ。今は私のことだけ考えてなさい。……ほうら、遠慮

しないで、もつとジロジロ見たら？」

模範的な生徒会長らしくもない誘惑ぶりだが、いかがわしいムードを盛り上げた。しかし観察を許すのは素振りだけで、裸の乳果を晒すことはしない。

「スタイルには自信があるのよ。最近はハンドモデル以外にも仕事の依頼が来るし」

美緒の美しい手つきによってこそ、グローブも格式高い気品を醸し出した。指を編み合わせる仕草にしても、折り紙を丁寧な折るかのようで。

切れ長の瞳が、待ちぼうけを食わされているオチンチンを見詰める。専用のブラで玉袋を締め付けられるだけでは、性的興奮は促されても果てられない。

「もうガマンできないのかしら？ 悠斗くん」

「そつ、そういうわけじゃ……」

射精したくてならないことに自覚はあった。だが、自分の手で扱って果てたとしても満足できない、という困った確信がある。

女の子にヌいてもらわないことには、もう射精に意味がない。

「いいわよ、由希奈にリードされるのは面白くないもの。それに剣舞劇のため、私たちはこの場所で親睦を深めるべきだわ。……男と女として」

悠斗の真正面で美緒が床に腰を降ろし、スカートにもかかわらず脚を組んだ。しなやかな脚線が折り重なり、紅茶色のストッキングを太腿の内側で引き伸ばす。ストッキング自

体は黒色のようなだが、生地の薄さに柔肌の白さが透けていた。

「美緒ちゃん？ 見えちゃってるんだけど……」

股座には別の生地も食い込んでいる。生徒会長のシヨーツはストッキングの中で、お尻のほうから脚の付け根をくぐっていた。おそらくブラジャーと同じ紫系だ。

「あなたが見てるから、見えちゃうのよ」

美緒の暗示めいた囁きは、何の答えにもなっていないことがかえって誘惑的だった。

悠斗が赤面するあまり顔を背けても、

「恥ずかしいのね？」

視線だけこっさり戻しても、

「やっぱり見たいんじゃない。いい子だから、こつちを向きなさい」

彼女のペースにまんまと乗せられ、逃げられない。

しかも生徒会長はスカートを捲しあげ、一度は内側に折り畳んだ脚を開いた。じれったいスローモーションで、はしたないM字開脚を見せびらかす。

「私をオカズにしたこと、あるんでしょ？ 悠斗くん」

脱いだ靴を右の爪先がぶらさげた。足癖の悪さといい、学院の代表ならではの模範的な振る舞いからは程遠い。学則に準じているはずの黒ストッキングが、シヨーツに独特の三角形を浮かび上がらせる。

「オ、オカズって……そんな」

妄想上での経験に心当たりがある男子は、口ごもることで白状した。オチンチンも鋭い勃起ぶりを見せつけ、ガマン汁を滲ませる。

「……私もあるのよ？ 悠斗クンをオカズにしたこと。……驚いたかしら？」

紅潮しつつ、美緒は余裕を崩すことなく気丈に微笑んだ。靴を脱ぎ捨て、ストッキング一枚だけとなった爪先をペニスに近づけてくる。

「まさか美緒ちゃん、あつ、あしで？」

親指が反り、黒色の薄生地を裏側からほぐした。右足も左足も、その親指の付け根で亀頭をくすぐり始める。剥き出しの快楽神経を包むように擦るのが、意外なほど上手い。

「うああつ？ こ、これって……はあ、ちよつと待つてよ！」

「待つてあげないわ。ほんと、ンッ、とんだマゾね」

悲鳴をあげるほど悠斗が快感に躊躇しても、雁太はストッキングとの衣擦れで強制的に痺れた。肉棒が根からのたうち、由希奈手製のタマブラをほつれさせる。

（踏まれてるのに、なんで？ もっと踏んで欲しいとか……）

単純に刺激だけなら耐えられたかもしれない。けれども生徒会長のおみ足でオチンチンを踏みつけてもらえる、という被虐的な性的興奮が、亀頭をより敏感にした。

「うふふ。こおやって踏んでもらうの好きなんじゃない？ 悠斗クンはマゾだもの」

向こうから押すように踏まれ、ペニスが反りすぎてしまう。

「あ、んはああ！ 美緒ちゃん、もっとやさしく！」

「そんな嬉しそうな声出してるのに、いいの？ 踏まなくっても」

意地悪な笑みを浮かべ、美緒は一回踏むごとに右足と左足を換えた。利き足の右のほうが容赦がなく、踵で玉袋も圧迫してくる。由希奈の手編みが悔しいのかも。

土踏まずから踵に掛けての曲線は、肉棒の反り方に驚くほど酷似していた。ちょうど亀頭の高さに指が届いて、こそばゆい痺れを与えてくれる。

「そうよ、ピンピンにしてなさい？ んあふっ」

両脚をUFOキャッチャーみたいにして、景品のオチンチンを掴みながら、生徒会長も息を乱し始めた。昂る男の子に同調し、命令口調の唇から灼けた吐息をおわせる。

（こんなにキレイな足が僕のを……！）

モデルもこなせそうな美しさを誇る爪先が、勃起を繰り返し這い上がった。ストッキングをまとっている妖艶な慎み深さが、足癖の悪さとギャップを生む。

普段の上品さと、今日にしている乱暴な足技の、どちらが本来の篠ノ宮美緒なのか。

「悠斗くんはそのままよ。ああ、私も気持ちよく……ンッ！」

美緒の右手がストッキングの股上をすり抜け、ショーツへとじかに潜り込む。

その股布から親指と人差し指、小指が脇へと食み出した。手袋のおかげでストッキング

に爪を立ててしまうことはなく、生地も薄いなりに丈夫らしい。

見えない中指と薬指の在り処が、男の子の興味と想像力をかきたてる。

「もしかして美緒ちゃん……お、オナニーして？」

「言ったでしょう？ 溜まつてるって、んあつあ、ストレス解消……いつもひとりでするけど、今日は悠斗クンと、はああん！」

釘付けになっている悠斗の前で、生徒会長が可愛い悲鳴をあげた。両脚に不規則な痺れを走らせ、勃起を踏み損ねる。それほど敏感な有様から目が離せない。

（美緒ちゃんもオナニしたりするんだ？）

オナニーならばいくら制御できそうなものだが、美緒の右手は一向に止まる気配を見せなかった。手袋を嵌めていなければ、ストッキングが破れていたに違いない。

「ほら悠斗クンも、あふ、もつと声を出さない。女の子だけイカせるつもりなの？」

気高い生徒会長の自虐的な悦がり姿が、獣欲を駆り立てる。おまけに肉棒にストッキングを擦り付けられては、悠斗も喘ぎに夢中になれた。

「み、美緒ちゃん！ そんな、はあ、足でいやらしくされたら！」

土踏まずの凹んだ部分が、向かい合わせて肉太を挟み込む。そして火を起こすみたいにくぐりと摩擦を集中させてくる。

「されたら？ あん、悠斗クンったらおねだりが上手ね。つふう、こうでしょ？」



ストッキングとショーツの股底を利き手でまさぐりながら、美緒は器用に脚を曲げ、オチンチンをなぞり上げた。半脱ぎの制服から覗ける双乳が、香汗を光沢とする。

しとやかな唇は喘ぎを散らしつつ、左手の手袋を噛んだ。人差し指と中指の又を舐め、唾液をたつぷりと絡める。半目がちで舌をのたくらせる表情が悩ましい。

「もう少し濡らさないと、ンッ、いけないわね。男の子のつて、精液が出るまではそんなに濡れないみたいだから……」

その手が足の間に割り込んで、腫れ上がった雁太に涎を塗りたくった。てのひらの側から、続いて甲の側から、指の間を怒張に穿らせる。

「はあっ！ これ、美緒ちゃんのが熱くって……うあ、はあああ！」

生温かい液はストッキングに染み渡り、ペニスの形にも馴染んだ。湿った薄生地感触が、右足と左足の二手に分かれ、雄々しい勃起を舐め降ろす。

ぬちゃちゃ、ぬちゃっ！ ぬちゅぬちゅ！

足の細やかな指遊びは粘音を奏で、男の子の昂りに拍車を掛けた。

「私がここまでしてあげてるのよ？ えはあ、ちゃんとイかないと、許せないわ」

そう強い刺激ではないはずなのに、じれったいくらいで。痺れを感じやすいオチンチンが、美緒の熱いまなざしに応えるようにビクビクと脈打つ。

足の爪先は親指で亀頭にしがみつき、土踏まずをサオにびつたりとフィットさせた。

「美緒ちゃんっ！ はあ、もつとコスって……！」

美しい足つきに見惚れ、続きを欲しながら、悠斗は由希奈に編んでもらった股間のブラジャーをずらす。由希奈に申し訳なく思っても、自発的な衝動には逆らえない。

（女の子の下着って、すごくいいかも！）

代わりに美緒のブラジャーを手にし、自分の胸肌を擦り付けることが、驚くほど自然にできてしまった。行為の変態さが美緒への執着を強烈に自覚させる。

「悠斗くんだったら、あん、どうしようもないヘンタイね。でもいいのよ……あふあつ、由希奈のなんか脱いで、私のだけ着けてなさい！」

普段はクールな美緒も一緒に息を荒らげ、嫉妬を吐露した。オナニーの快感で紅潮し、瞳に艶を秘めながら、裸となった精子袋を独り占め。

爪先で睾丸を転がしては、足の裏でサオを這い上がっていく。

「ヘンになっちゃうよ、んはあ、僕……美緒ちゃんのあしでっ、くうう！」

「そうよ、ン、私のことだけ考えてイって？ 今くらい由希奈のことは考えないで」

由希奈のことを考えないで、と言いながら、その名前を出しているのは美緒のほうだ。オナニーのほぐし指も深くして、艶かしい肉体に自ら震えを走らせる。

制服の隙間では柔乳が揺れ、少しだけ乳輪のピンク色を覗かせた。柔肌は見るからに汗だけで、黒ストッキングの太腿も濃厚な色気を醸し出す。

「あなただつて、えあはあ、ずっと期待してたんでしょ？ 私とこーいうコト。まさかこの私を、んふっ、焦らしてたなんてこと」

彼女の優美な身体つきに、悠斗は長らく憧れと同等に性欲も密かに抱いてきた。

（そりゃ美緒ちゃんの彼氏役だなんて、僕だつて自慢に思つてて）

同時に独占欲も満たされていた、かもしれない。男除けのフェイクとはいえ、彼氏としてのポジションに甘んじ、「いつかは美緒と」と思い描いたものなのだから。

「どうして手を出してきてくれなかったのかしら？ へあつ、女心を何だと思つてるの」

「それは美緒ちゃん、ほんとに付き合つてるわけじゃなかったし……うああ？」

とぼけたわけでもなくとも、爪先で勃起をひん曲げられ、懲らしめられた。

「そこまで言わせるつもり？ はあん、意地悪なのね、悠斗クンつて。今日は徹底的に私の魅力を、ン、教えてあげるわ」

折り重なつた右足と左足が、肉棒と玉袋を同時に踏み込む。

おかげでマゾ気質のオチンチンは、さきつちよが真つ赤になるまで興奮度を高めた。踏みつけられてもすぐ元の角度に戻り、悦痺れを漲らせて次を待つ。

「ご、ごめん、美緒ちゃん！ 僕……はあつ、もうガマンできないよ！」

続けざまにサオを足で挟まれ、扱かれながら、悠斗はひっきりなしに喘いだ。先走り汁と涎で、肉棒だけでなく彼女の爪先もぬめ光る。

「ガマンは禁止よ、ほら、んふあつ！ はやくいつちやいなさ、へああ？」

続けざまに急所に快感を与えられ、彼女は自ら与えて、お互い息継ぎの暇もない。

ぬちゃつぬちゃ、ぬちゃつ！ ぬちゃぬちゃ！ ぬちゃ！

男の子の苦悶ぶりを見詰めて、美緒もはしたないオナニーに耽った。ショーツの三角形に股上から入り込んだ右手が、ストッキングに淫液の染みをばらまく。

「んああつ、私も悠斗クンと、いひあ！ いつちやう、イク……いきそおなの！」  
絶頂が近い素振り、ロングヘアを乱すさまが狂おしい。

お互いもどかしかった腰の動きがだんだんリズムに乗ってきた。悠斗からも突き上げるようにして、自ら望んで足に挟まる。

蒸れたストッキングがじかに擦れ、敏感な亀頭を刺激した。足でモノを扱く、という生徒会長の淫らな痴態を目撃してしまい、目を見張る。

「でっ出る！ 出ちやうよ、み、美緒ちゃんのあしで！ はあはあはあッ！」

その足技だけでなくオナニーまで無遠慮に眺めながら、悠斗は声高らかに悶絶した。鼓動のリズムが跳ね上がり、剥き出しのオチンチンに熱い血潮を巡らせる。

「出して！ あんつ、私のあしで最後まで……んくふうう！」

牡と牝の息遣いが呼び合うように重なった。

涎まみれのストッキングに撫でられ、痺れと痺れの間隔が短くなる。身体中が汗だくで

過熱し、腰以外は動かしてられない。

ぬちやぬちやぬちや！ ぬちやぬちやぬちやつ！

美緒のほうは座った姿勢で屈伸運動するかのように、肉感的な太腿を弾ませた。さらに股間にあるストッキングの暗がりを、右手で混ぜつ返しながら、嬌声を張り上げる。

生徒会長らしくもない、緩みきった顔つきで。

「いいいいイクう！ 悠斗くん、やんつ、はやく！ はやく出して？ んああ、私もうらめなの、さきに、イク、イッひやううううううううううッ！」

右足と左足がそれぞれ肉棒の側面を擦りつつ、根元をぎゅつと踏みつけた。

彼女の淫らな素顔に劣情が燃え上がった瞬間、股間に直撃を食らい、物理的な熱の膨張を堪えきれなくなってしまう。

「僕もイクよ、うああ、美緒ちゃんと、へえああああああああああ！」

言葉にならない悲鳴とともに、オチンチンが高熱を噴き始めた。

どびゅびゅ！ びゆるっ、びゆるびゆる！ びゆくびゆくびゆくびゆく！

快感感がしなるように尿道を駆け抜け、汚濁を放つ。

放精が始まるとともに悠斗は胴震いに襲われ、舌の先までわななかせた。頭の中が白い恍惚感で満たされ、自覚なしに涎を垂らす。

美緒も蕩けた表情になって、涎つきの美唇を綻ばせた。

「へはあああああ……っ！ 悠斗クンの前で、えへあ、オナニーなんてえ……！」  
うっとりとした艶笑を浮かべ、睫毛の手入れが細やかな瞳を潤わせる。

「とまんないよ、美緒ちゃん！ はあっ、うああ！」

悠斗の放物線は脛や膝によつて妨げられ、彼女の股間まで届かなかつた。ただし黒色のストッキングは白濁汁でどろどろだ。

薄生地をほぐしきれなくなつた爪先が、拾つたばかりの粘液を滴らせる。

彼女の股間もぐっしよりと濡れ、ストッキングにシヨーツの紫色を透き通らせた。自慰を果たした右手が、三角形の両脇で指をびくびくさせる。

（美緒ちゃんといっちゃつた……美緒ちゃんと！）

無意識のうちに悠斗は美緒の芳しさを堪能していた。精液臭がきついはずなのに、本能で嗅ぎ分けられるかのようだ。倦怠感を伴う余韻も深く、淫猥な心地よさに酔いしれる。

「悠斗クンなので、んふっ、あしがもう……メチャメチャだわ」

粘液まみれである足の親指を噛み合わせながら、美緒は太腿を閉じ合わせた。自慰の結果を隠したうえで、ストッキングから右手を抜き取る。

手袋は指先ほど愛液でぬらついていた。その手が見せつけるように脚線を撫で、悠斗の種ミルクをてのひらに集めていく。

「私にこんなコトしていいのは、あなただけなのよ？」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元的なヒロインは、美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!